

[三宅管内の遺伝資源の収集・評価・保存]

三宅管内の遺伝資源の収集・評価・保存

～三宅村における「メキシカンライム」の開花特性および果実品質特性～

池田行謙・石塚幹子*

(島しょセ三宅) *現研究企画室

【要 約】 三宅村における「メキシカンライム」の果実品質は、糖度約8～9，酸含量約6～8%，果汁歩合は約40～50%である。収穫期は、1果平均重100g前後が確保できる8月下旬から、緑色果（CC値1.5以下）を維持できる9月中旬である。

【目 的】

現在、都内で経済栽培される香酸カンキツ類はレモンが中心で、ライムはほとんど認められない。一方、国内市場における国産ライムの需要は高まっており、今後、島内外において一定の需要が見通せることから、本試験で果実品質を調査し、栽培の技術資料とする。

【方 法】

露地栽培の「メキシカンライム」13年生2樹を供試した。開花期は、「カンキツの調査方法」（農林水産省果樹試験場興津支場編（1987））に基づいて、2021年3月から4月にかけて調査した。果実肥大は、樹冠赤道面の果実を1樹あたり10果供試し、2023年8月1日から11月1日まで約15日間隔で調査した。果汁品質は、9月10日から11月2日まで約10日間隔で調査した。収穫果の果皮色（レモン色系カラー・チャート値；以下、CC値）は、1樹あたり10果を無作為供試し、2023年8月30日から11月10日まで約10日間隔で調査した。なお、収穫期の評価は、輸入ライムの市場出荷規格を参考にして、1果平均重100g前後、緑色果の出荷を前提としてCC値1.5以下をそれぞれ評価の基準とした。

【成果の概要】

1. 開花期調査：発芽期は2月19日で、「リスボン」と比べて約20日早かった。開花始期は3月5日、開花盛期は3月22日で、「リスボン」と比べて各々18日、9日早かった。開花終期は4月14日で、「リスボン」より8日遅かった（表1）。
2. 果実肥大：8月上旬以降、継時的に肥大した。果径指数（横径/縦径×100）は、8月1日には76.3、9月1日には81.6、10月2日には85.2と推移し、果実の形状は腰高からやや球形に変化した（図1）。
3. 果汁品質：9月中旬から11月上旬にかけて、糖度（Brix%）は7.8～8.7で、増減1未満で緩やかに推移した。酸含量は5.9～7.6%で、継時的に1～2%減酸した。糖酸比は、約1～1.5で推移した。果汁歩合は、約36～49%で推移した（図2）。
4. 1果平均重および果皮の着色：1果平均重は、8月下旬から9月上旬にかけて100gに達した（データ省略）。果皮の着色は、8月30日から11月10日にかけて継時的に進行し、CC値は9月30日に基準値1.5以上の1.6となった（図3）。
5. まとめ：三宅村における「メキシカンライム」の果実品質は、糖度約8～9，酸含量約6～8%で、果汁歩合は約40～50%と他の一般的な香酸カンキツ類と比べて高い。収穫期は、1果平均重100g前後が確保できる8月下旬から、果皮CC値1.5以下を維持できる9月中旬までとする。本成果は単年度の結果であるため、年次変動を確認する必要がある。

表1 「メキシカンライム」の発芽および開花特性（2021年）

品種名	発芽期 ^a	開花期 ^b		
		始期	盛期	終期
メキシカンライム	2/19	3/5	3/22	4/12
(参考) リスボンレモン ^c	3/11	3/23	3/31	4/4

a) 発芽期：樹冠中央部の緑枝の芽の過半数が3mm以上伸長した日

b) 開花始期：蕾の連続開花日，開花盛期：80%開花日，開花終期：50%落弁日

c) 露地栽培の3年生のデータを参考とした

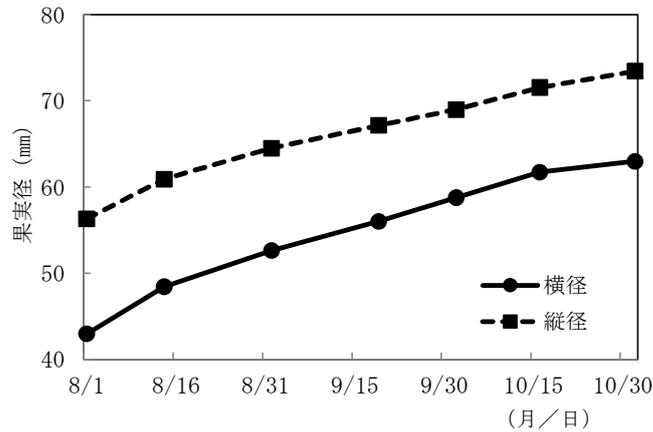


図1 「メキシカンライム」の果実肥大の推移

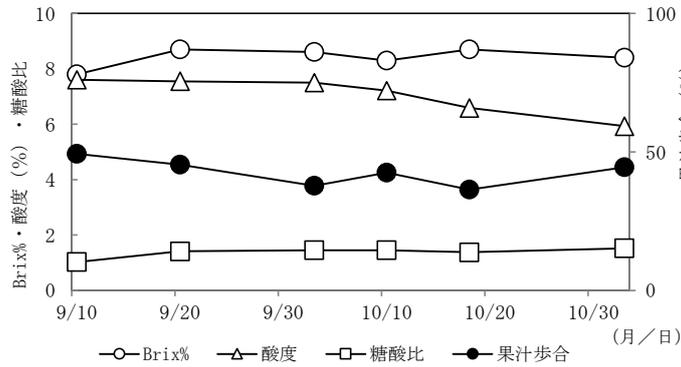


図2 「メキシカンライム」の果汁品質の推移

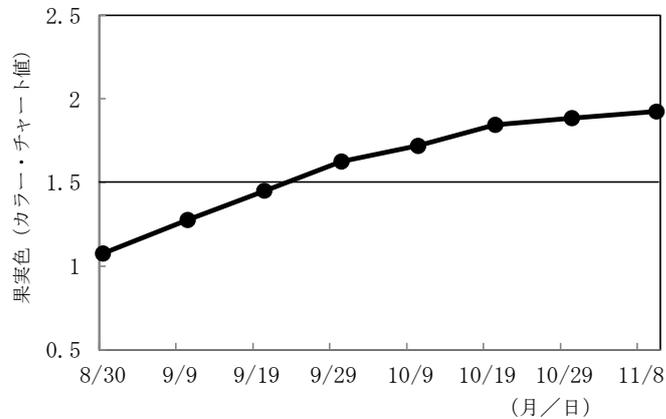


図3 「メキシカンライム」の果皮色の推移

(収穫期の判断基準は、果皮CC値1.5以上)